

# 『新古今』 羈旅歌の「白雲」詠の成立

佐藤茂樹

「白雲」の八代集における部立別の用例数を一欄にする  
と次のようになる。

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	計
春	2	4	1	2	6	5	6	9	35
夏									
秋	1							1	2
冬		1					1		2
賀				1		1	1	1	4
哀傷	1	1						1	3
離別	3	1	1	1					6
羈旅		1		1				6	8
恋	1	5	2	1	1		1	3	14
雑	3	3	2		1	2	2	2	15
その他			1					1	2
計	11	16	7	5	9	8	11	24	91

「白雲」の八代集における用例数を見ると、「白雲」は以降の傾向として認められるが、羈旅歌での増加は、石川『新古今』において増大している。春歌の増加は『金葉集』常彦氏の御考察のように「何の予測も生じない」ものとし

て考えられる。そこで、本稿では、羈旅歌に素材としての伝統をもたない「白雲」がいかにして羈旅歌の中に定着したのか、その過程を追うこととし、その中で達成された「白雲」の本意について考えることとする。「白雲」についてはすでに、石川常彦氏の御研究があるが、ここでは、(1) 矚目の景としての即物的「白雲」、(2) 枕詞的序詞的修辭機能を中心に用いられているもの、(3) 見立てによるものという表現論を中心とした御考察であったが、本稿では部立別による表現内容から考察を進めることとする。

注1 『拾遺』『金葉』『詞花』には羈旅部と別部との区別はない。

注2 『拾遺』の雑は、二首ともに雑恋である。

注3 その他の『拾遺』の一首は物名であり、『新古今』の一首は釈教である。

# 一

春歌での特徴は、「白雲」を桜と見立てる発想である。

- (1) 桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲  
(古今・春・五九 つらゆき)

- (2) み吉野のよしの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ  
(後撰・春・一一七 よみ人しらず)

桜の花が「白雲」と見え、見え紛ったとする興趣を中心に据えた素朴な発想の歌である。この着想の発展として、

(3) 白雲と見えつるものをさくら花けふはちるとや色ことになる  
(後撰・春・一一九 つらゆき)

(4) 山ざくらしらくもにのみまがへばやはるの心のそらになるらん  
(後拾遺・春・一一一 源縁法師)

のように、桜は「白雲」と見えるものだということを自明とした発想があり、

- (5) しらくもにまがふさくらをたづぬとてかからぬやまのなかりつるかな  
(金葉・春・四二 源貞亮朝臣)

のように「しらくもにまがふさくら」と成句的に詠まれるようにもなった。これらの桜は峰の桜、遠山桜である。満開の桜になぞらえられるのであるから、桜そのものの美ではないとしても、「白雲」にも満開の桜のもつ華やかな美しさがイメージされていると言って良い。そうした中で、「白雲」と桜の美とを一体化した歌として、次の二首があげられる。

- (6) 白雲とみゆるにしるしみのよしののやまのはなざかりかも  
(詞花・春・二二 大藏卿匡房)
- (7) おしなべて花のさかりに成りにけり山のはごとに

かかるしら雲 (千載・春・六九 円位法師)

『古今集』から『千載集』までの二六首の春部の歌の中  
にあって、次の『古今』歌は現実の「白雲」が歌われてい  
る。

(8) 春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにこ

とやつてまし (古今・春・三〇 凡河内みつね)

この「白雲」に対して、窪田空穂氏は「白雲」は雲を  
感覚的にするために添えたもの<sup>(2)</sup>と説明されている。又、  
渡辺秀夫氏は「常世に通う<sup>(3)</sup>」ものとして捉えられている。

上句の「春くればかりかへるなり」は、聴覚的に捉えられ  
た雁に対する直観的感慨であり、春に去り行く帰雁に対す  
る同情の思いが込められていると考えられる。雁の通い路  
である「白雲の道」には、上句の同情の念と響き合うもの  
があるかもしれない。しかし、「こしへまかりける人<sup>(4)</sup>」へ  
の伝言を雁に託そうというのであるから、雁の道中を示す  
「白雲のみち」、雁の帰り道の途中のついでを示す「白雲の  
みちゆきぶり」には、同情の念よりはむしろ、帰る雁を友  
の所へまで確かに導く道しるべとしての希望の意味が付与  
されているのではないかと思われる。そう読むことによつ  
て、春歌の「白雲」は共通して、「遥かに遠く高い<sup>(5)</sup>」イ  
メージとともに、満開の桜になずらえらるる明るく華やか

な美を有した歌語としての意味をもつていえると言え  
る。こ  
うした伝統的な詠法を受け継ぎ『新古今』春歌、九首中八  
首は桜の比喩としての「白雲」詠の歌である。比喩でない  
叙景としての「白雲」を詠んだ一首として次の歌がある。

(9) しら雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風

ぞふく (新古今・春・七四 藤原雅経)

上句は実景ではなく、序詞として考えられているが、そ  
の景を久保田淳氏は次のように考察されている。

青柳を、近景としてではなく、遠景として、葛城山に  
見出さねばならないのではないか。しかも、遠景であ  
るからには見える筈がないのにも拘らず、あたかも望  
遠鏡を通して覗いたように、その青柳が、美女の黒髪  
さながら春風に靡いているさまを、見届けなければな  
らないのではないか<sup>(6)</sup>。

「遥か遠く」にある「白雲」でありながら、「たえまにな  
びく」という細かな表現が遠景を近景たらしめている。遠  
景を示す「白雲」であるが、クローズアップされること  
によって、色彩的対比がより鮮やかになり、その絶え間に風  
に靡く青柳の爽やかな景色が描かれている。『新古今』の  
排列にあって、この例歌は青柳の部に属しており、桜花の  
歌の前に位置している。それだけに、他の春歌における

「白雲」の用法と同じとは言えない。しかし、新古今当代歌人の春歌における「白雲」詠は

- (10) かづらきやたかまの桜さきにけり立田のおくにか  
かる白雲 (新古今・春・八七 寂蓮法師)

- (11) 白雲のたつたの山の八重さくらいづれを花とわき  
てをりけん (新古今・春・九〇 道命法師)

- (12) いはねふみかさなる山をわけすて花もいくへの  
あとのしら雲 (新古今・春・九三 藤原雅經)

- (13) さくら花ゆめかうつつか白雲のたえてつねなき峰  
の春風 (新古今・春・一三九 藤原家隆朝臣)

のように、桜と「白雲」とは一体化している。こうした着想は、例歌(1)の貫之歌の影響であると思われる。こうした当代歌人達の共通した発想を思うと、この雅経歌の「白雲」も桜そのものを表すとは言えないが、桜を思わせるほどの華麗なイメージを有していると思われる。この一首には、多分に非現実的な側面による視覚的イメージによる発想<sup>(7)</sup>があることを思うと、「柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦」と歌った能因の影響を受け、桜のたえまになびく青柳の姿に、葛城山の春の錦を見た<sup>(8)</sup>と読み取ることも可能だと思われる。(9)の雅経歌は「白雲」と「桜」との明確な関係は断定出来ないが、『新古今』春歌の「白雲」は「遙か遠く高

き」への視点と、桜と一体化した華麗なイメージをもって歌われていると思われる。

- (14) さきさかずよそにても見む山ざくら峯の白雲たち  
なかくしそ (拾遺・春・三八 よみ人しらず)

この例歌は春歌の中にあつては特異な歌である。「白雲」が隔てとなることを根底において、「白雲」は山桜を隠すものとして着想されている。「白雲」を華やかな存在として見てきたこれまでの例歌とは違う。しかし、「白雲」の存在を否定しているわけではない。「白雲」と「桜」とを見紛えるという発想を根底において、「山ざくら」が咲いたか、咲いていないか、まだわからないから、それをはつきりと遠くからでも知るために、白雲よ嶺に立たないで欲しいと歌っている。「山ざくら」が咲いたか、咲いていないかを知りたいのであり、そのことが問題であつて、それが分かりさえすれば、「白雲」の立つことは問題なのではないと思われる。「白雲」と「桜」の類似性を根底においての軽妙な発想の歌である。やはり、この「白雲」にも「白雲」を「桜」に見立てた華やかさのイメージは生きていると思われる。

- (15) 白雲のうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身と  
はしりぬる (後撰・春・四 よみ人しらず)

詞書に「ある人のとにひまゐりの女の侍りけるが、月日ひさしくへて、む月のついたちごろまへゆるされ」とあるように、初めて主人の前に出ることを許された女房が、その誉れを歌にしている。「白雲のうへ」とは、まさに今まで自分の知らなかった世界のことであり、作者にとつては「雲の上」という宮中にも匹敵することであつた。女房としての光榮と喜びが新しい世界を讚美する思いとなつて「白雲」と表現したのだと思われる。この「白雲」は現実の雲ではないが、春歌の「白雲」の華麗なイメージを踏まえての讚える意の言葉であつたと思われる。

次に春以外の季歌は次の四首である。

- (16) 白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる  
秋のよの月 (古今・秋・一九一 よみ人しらず)
- (17) 白雲のおりある山とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり  
(後撰・冬・四八四 よみ人しらず)
- (18) 雪つもるみねにふぶきやわたるらむこしのみそらにまよふしら雲  
(千載・冬・四五五 一条院御製)
- (19) 白雲をつばさにかけて行くかりの門田のおもの友したふなり  
(新古今・秋・五〇二 西行法師)

(16)の例歌の「白雲」も「遙かに遠く高く」にあることを意味し、窪田空穂氏が言われるように、「天辺の、声も聞

えないような所を飛んでいる雁を、写生的に捉えたものであるが、『白雲』の『白』と『雁』との色の対照で、小さく見える雁を、はつきり見えるものにしてゐる」と考えられる。澄み渡つた秋の夜、遠い旅路をやつてきた雁に対する感慨が上句に込められている。一年振りに飛来した雁に対する懐かしみ、信愛の情、ねぎらいの心が読み取れる。この「白雲」は雁の姿を極立たせる背景としての意味だけでなく、雁にとつての道しるべであり、目標、支えであつて、雲の「白さ」は希望の輝きとして一首の中に徴標されているように思われる。

(19)の西行歌は、(16)の古今歌の影響下にあると考えられる。西行歌は古今歌と違い、「友したふなり」と作者の感慨を直接的に表現している。この「慕う心」を石原正明は、別れの寂しさと見たのか、「春雁の歌なるを、ここに入れるは、撰集のあやまり歟」(『尾張廻家苞』)と記している。しかし、この「したふ」は、長い旅路の果てによりやくたどりついた、又はたどりつこうとしている雁が、一足先に休らつてゐる雁に対しての信愛と長旅の労苦へのいたわりなどからの雁の鳴き声であつたろうと思われる。上句の「白雲をつばさにかけて行くかり」には、寂しさや辛さではなく、目的地に到着し得た、もしくは、まもなくである

という安堵感が軽快な飛行となつて歌われている。この「白雲」は春歌と同じではないが、華やかさに通じるものを有していると思われる。

17の後撰歌は、「雪」を「白雲」と見た錯覚を歌つた歌である。共通する白に着眼を得た素朴な発想である。それは「白雲」を桜に紛える着想と似たものであるが定着はしなかつた。「白雲」と見たのは、実は「雪」だつたというのであるから、この「白雲」には「雪」のもつ冷たさはないと言える。その「白さ」の視覚的印象美を見ていると言つてよいと思う。春歌の「桜」と見紛うほどの華やかさはないが、極立つ「白」の美を見ていると思われる。

一方18の千載歌の上句は、雪の積もつた嶺の一面に吹雪が吹き荒れている山の荒涼とした景を推量している。そして、そう推量した根拠を下句の遠く越路の空の「まよふしら雲」に置いている。「まよふしら雲」とは「おびただしく漂い滞っている白雲」<sup>(16)</sup>と考えられている。遠目にもはっきり見える「白雲」の下では、吹雪に荒れる荒涼とした山の景色が展開している。この「白雲」には、春歌に見られたような華やかな美は有していない。この「白雲」は冬の山の厳しさを知らせるものであるだけに、辛さや悲しみをもつて見つめられていると思われる。しかし、そうした感

情も水や雪のごとく冷え冷えとしたものではない。むしろ「白雲」は「まよふしら雲」と表現されたように、風によつて乱されるあわれな存在として捉えられていると思われる。確かに、「まよふしら雲」とは、「空に雲の充つる」<sup>(17)</sup>状態を示すのであろうが、その景色を表現するにあたつて、「充つる白雲」「かかる白雲」ではなく、「まよふ」という詞で言い表そうとした点に、風のために乱れ迷う「白雲」を描くことにねらいがあつたと思われる。それは、「白雲」を雪を降らせる無慈悲なものとしてではなく、逆に、春の頃、華麗な姿を見せた同じ峰の白雲が、冬には風に翻弄される「あはれ」な存在として見ている。そして、その「あはれさ」を歎くことではなく、美化するものとして「白雲」の「白」は機能していると思われる。

## 二

恋歌は次の十四首である。まず千載までの十一首をあげる。

- (1) 風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か  
(古今・恋・六〇一 ただみね)
- (2) 今のみとたのむなれども白雲のたえまはいつかあらんとすらん  
(後撰・恋・五三六 よみ人しらず)

(3) 高砂の峰の白雲かかりける人の心をたのみけるかな  
(後撰・恋・六五二 よみ人しらず)

(4) たえぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよそにおもはずもがな  
(後撰・恋・八八一 女五のみこ)

(5) 白雲のみなひとむらに見えしかどたちいでて君を思ひそめてき  
(後撰・恋・九八七 藤原有好)

(6) 白雲のゆくべき山はさだまらず思ふ方にも風はよせん  
(後撰・恋・一〇六五 よみ人しらず)

(7) いづくとも所定めぬ白雲のかからぬ山はあらじとぞ思ふ  
(拾遺・恋・一二二七 よみ人しらず)

(8) 白雲のかかるそら事する人を山のおもとによせてけるかな  
(拾遺・恋・一二二八 よみ人しらず)

(9) いつとなく心そらなるわがこひやふじのたかねにかかるしらくも  
(後拾遺・恋・八二五 相摸)

(10) しらくものかかるやまぢをふみてぞいとどこころはそらになりける

(金葉・恋・三六六 中納言顯隆)

(11) ひとめみし人はたれともしら雲のうはのそらなる恋もするかな  
(千載・恋・六四七 徳大寺左大臣)

(1)の古今歌の上句は「たえて」を導く序詞である。その印象鮮明な詞づきが評価されている。風が吹くと峰を離

れ消え行く「白雲」の光景は、冷淡な恋人を思い起こさせる契機となり、それ故に、消え行く「白雲」に作者の恋人を重ね合わせる読みは可能と思われるが、この一首にあつては比喩表現としては解されていない。それは、恋部における「白雲」の用例は、『後撰集』以後増え、定着したと言えるが、「白雲のたゆ」「白雲のかかる」といった詞続きで歌われ、「白雲」をわが思い人に喩えるという発想の歌がないことから解される。少なくとも『古今』以後『千載』まで、この歌の「白雲」は恋人の比喩表現として解されなかったことがわかる。

(2)の後撰歌の「白雲のたえま」は枕詞の用法である。今だけが絶え間であると期待しているようだが、「白雲のたえま」に喩えられるような一時的な逢瀬の途切れはいつあるのだろうかと訴えている歌である。「白雲のたえま」とは雲の生態を言い表しているのであるが、もう永遠に会えないのではないかという恐れの中にあつて、愛し合う二人にとつては「白雲のたえま」は憎むべき対象である。しかし、この例歌にあつては、今の別れが一時的な「白雲のたえま」であつて欲しいという願ひに変化している。その意味において、この「白雲」はその色の通り、希望のしるしとなつていと思われる。

(3)の後撰歌は、「白雲」は山にかかることを利用して、「高砂の峰の白雲」は「かかりける」を導く序詞となっている。そして、このような人を頼りとしてきたことよと冷淡な恋人に対して、愛想づかしをした内容の歌となっている。「高砂の峰の白雲」は序詞であるためか、下句との関係において唐突な感を受ける。それだけに、「白雲」の一首の情調形成に果たす役割はないと考えるべきかもしれないが、その「はたらき」を考えると、「遙か遠く高く」にある高砂の峰に、動かずにじつとかかっている「白雲」は、何事にも動じず、作者の心を何も理解しない無情なものとして映ったものと思われる。ここには春歌に見られるような「白雲」の華やかさのイメージはない。むしろ、華やかで希望を与えるべきはずの「白雲」がそうでないため、一層無情なものとして映っただろうと思われる。

(4)の後撰歌の上句の「たえぬると見ればあひぬる白雲」とは、やはり、雲の生態から発想された「おほよそ」を導く序詞である。一首は、私をおおよそに思わないで欲しいと願った歌である。雲のよそのように通り一遍ではなく、強く愛して欲しいという願いである。この「白雲」がイメージするものは、望ましくないものとして、遙か遠く手の届かない、それ故、冷淡なものであっただろうと思われる。

る。

(5)の後撰の「白雲のみなひとむらに」とは、詞書「ろききぬどもきたる女どもの、あまた月あかきに侍りけるを見て、あしたにひとりがもとにつかはしける」から判断されるように、女性達が「白雲」のように一つの群と見えたということである。一首はそうした女性達の中で傑出したあなたを思い初めたと歌っている。「白雲」とは、作者の愛する人を含めた、その場にいた女性達を形容している。

この「白雲」は否定的に扱われているわけではないが、作者の想い人の美しさを埋没させてしまうものとして歌われている。春歌の桜にも喩えられるべき華やかさは有していないと言える。

(6)の後撰歌の上句は眼前の白雲の景である。中空に浮かんでいて寄るべき山が定まらないという描写は、自分の愛する人がどこににいるかわからないでたえずにいる作者の姿と重なり合うものである。この叙景は客観的なものと見られるが、「白雲」は山にかかるものという和歌的常識が根底において発想されている。中空にぽっかり浮かんでいる「白雲」は、作者のより所のない空虚感、不安感を示していると思われる。

(7)の拾遺歌の「白雲の」は「かかる」を導く枕詞である。



多情な恋人を揶揄した歌である。「所定めぬ白雲」と「白雲のかからぬ山はあらじ」という雲の生態を取り上げ、それはわが愛する多情な男と同じであると着想している。この「白雲」は愛する男を比喩しているが、讃える気持ちではなく、諦めの気持ちがうかがえる。

(8)の拾遺歌の「白雲の」も枕詞である。このような嘘を言う人を愛してしまったことを後悔した歌である。白雲のかかるように、このような嘘を言う人という発想を考えると、「白雲」には、「白雲」が遠目にも明らかのように、明白な嘘を言うことに対する白々しさの思いが表されていると思われる。以上の内、よみ人しらずの「白雲」詠は、四首中三首が「白雲のかかる」という枕詞を用いた和歌の常識に基づいた発想がなされている。又、枕詞を用いていない場合も、「白雲」は峰にかかるものという通念が根底にあり、叙景的表現とは言え、形式的常套的な発想が見られる。「白雲」が、男を比喩する場合にも桜に比されるような華やかさをもつイメージはない。しかし、「白雲」の色彩的印象は強く、そのためか、恋における失望、落胆の情調の中にあっても深刻さはなく、むしろ、軽妙さをもって歌われている。

(9)の後拾遺歌は、いつも上の空である自分の恋する心は、

喩えてみれば富士の高嶺にかかる白雲のようなものなのだろうかと推測している。(10)の金葉歌、(11)の千載歌も同様に恋する者の落ち着かない、上の空なる心の状態を歌っている。これら三首は、今までの恋歌の用法とは違って、「白雲」が「遥か遠く高く」、空の上にあることを基にしての、上の空なる恋する自分の心との共通を歌っている。「上の空」という言葉上の興味から発想されたもので、やはり、形式的なものと言えるだろう。失意の思いを歌っているのではないだけに、これらの「白雲」は、憧れと切なく甘いイメージが揺曳している。

恋歌における「白雲」の用法は、「白雲」の生態を基にした枕詞や序詞の用法を用いて表現されており、「遥か遠く高く」というイメージを有し、更に、「白」の鮮やかさが極立っている。三代集時代は、恋の苦悩の中で詠まれていたのに対し、『後拾遺』以降は、恋する者の心を表すものとして表現されているという変化が見られる。

こうした流れの中にあつて、新古今恋部での第一の特徴は、三首の歌は全て当代歌人の歌ではなく、読人しらずを含めた、前代歌人の歌であるということである。これは、新古今恋部における「白雲」詠の用法は、新古今歌人たちによる新しい創造ではなく、過去の歌の中に見出した再発

見のものであったと言ふことが出来る。

- (12) よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲 (新古今・恋・九九〇 読人しらず)  
(13) しら雲のみねにしもなどかよふらんおなじみかさの山のふもとを

(新古今・恋・一〇一一 藤原義孝)

- (14) おもひやる心もそらにしら雲のいでたつかたをしらせやはせぬ

(新古今・恋・一四一四 兵部卿致平親王)

(12)の新古今歌は、恋心を抱きながら、打ち明けられないでいる男の歎きを歌っている。風巻景次郎氏が、「問題は、この歌が朗詠集では雲の歌であるのに、新古今では恋の歌になっているということである。この部類上での意識の変化、それは、歌の解釈に変化が生じたことであり、古典の受け取り方が時代によつて変化して行つたことの最もはつきりした実例であつたということができると言われ、久保田淳氏が「未だ近づき難い恋人に対する憧憬を歌つて、永遠に新鮮である。恋に陥り、まだそれを打ち明けていない男にとつて、恋人は高嶺の白雲であり、高嶺の花なのである」<sup>(14)</sup>、片山享氏が「高貴感を、『みねの白雲』に縹渺たる優艶感を漂わせ、近よりがたい高貴な女性を暗示して、そ

の女性へのほのかな恋情の不安と焦燥を歌うのである」<sup>(15)</sup>と考察されるように、「たかまの山の嶺のしら雲」とは、高嶺の花である女性を形容しているのである。この例歌は、『新古今』では恋歌として認識されているが、指摘されているように『和漢朗詠集』では、「雲」の例歌として取り上げられている。制作年代や作歌事情の不明な歌であるが、民謡的な謡い物としての古さをもつことが指摘されている<sup>(16)</sup>。断定的には言えないが、眼前の雲を歌つた自然詠の歌として永く享受されていたことと思われる。それを『新古今』の選者たちによつて恋歌として理解されたところに、「白雲」詠の変化があつたものと思われる。その契機になつた歌は、(1)の『古今』の忠実歌であつたと思われる。「風ふけば峰にわかるる白雲の」とは「たえて」を導く序詞であるが、その単純で鮮明な景は実景というよりは、作者の心象風景と言ふべきものであつたろう。峰を離れ行く「白雲」に、わが恋人の面影を重ねて「たえてつれなし」と歌つたと、選者たちには理解されたものと思う。「白雲」の無情さと恋人の無情さとは、気分的につながると解したのである。「白雲」をつれない恋人を象徴するものとして解するという新古今的意識が、この例歌を恋一の巻頭歌とすることになつたものと思われる。

(13) の新古今歌は、三角関係にある女を責めた歌である。この「白雲」は、新古今的な読みにあつては、女の比喻として考えられる。「白雲」は三笠の山の峯にだけかかり、ふもとに降りてくることはないという自然現象を歌いながら、女が作者義孝より身分の高い頼忠のもとに通うことを非難しているのである。

(14) の新古今歌の「白雲」は、作者の恋人への上の空なる思いを表わし、さらに、その心を恋人は知らないという「知ら」を掛けたものとなっている。自分の恋する上の空なる心を「白雲」に喩えるのは、『後拾遺』八二五歌に見られたのと同じ発想と言える。又、「しら雲の」は「いでたつ」にかかる枕詞でもある。「しら雲のいでたつかたをしらせやはせぬ」の、旅立つあなたの行く所をどうして私に知らせないのかという文脈にあつては、「白雲」は、作者に行き先も告げず去つた恋人を意味していると言えるだろう。

以上のように、これら『新古今』の前代歌人の三首の「白雲」は、新古今選者たちによつて見出された、つれない恋人を象徴するという意味を有している。しかし、つれない恋人を言い表わすといっても、憎しみや恨みの対象ではない。読人しらず歌においては、憧れや致平親王歌にお

いても、つれない恋人ではあるが、その人を讃える意を込めて鮮やかな「白雲」として形象したと言える。恋する者の苦しみを歌う恋歌にあつて、「白雲」に、冷淡ではあるが、恋人を讃える意をもつものとしての意味を、『新古今』において初めて確立したと言える。

### 三

賀歌は次の四首である。

- (1) きみがよはちよにひとたびあるちりのしらくもかかる山となるまで

(後拾遺・賀・四四九 大江嘉言)

- (2) きみが世はしら雲かかるつくばねのみねのつづきのうみとなるまで (詞花・賀・一六四 能因法師)

- (3) しら雲にはねうちつけてとぶたづのはるかに千代のおもほゆるかな

(千載・賀・六二四 二条院御製)

- (4) 神無月紅葉もしらぬときは木に万代かかれ峰のしら雲 (新古今・賀・七二〇 清原元輔)

「白雲」は賀歌の中心的素材ではないが、祝い、讃えるというテーマの中にあつて、「遥かに遠く高く」、人知の及ばないという意味において「白雲」も一首の祝意における

情調形成に役割を荷っている。(4)の新古今歌は、永遠の榮えを讃えるために、永遠なる常盤木に「白雲よ、永遠にかかれ」と命じ、祝意を込めている。この「白雲」は色彩的効果をもつが、「白」のもつ、純粹性、高貴さといった意味あいが意識され用いられていると思われる。

哀傷歌は次の三首である。

- (5) 誰見よと花さけるらむ白雲のたつとはやくなり  
にしものを (古今・哀傷・八五六 よみ人しらす)  
(6) 君がいにし方やいづれぞ白雲のぬしなきやどと見るがかなしさ (後撰・哀傷・一四一六 清正)

(7) 尋ねきていかにあはれとながむらむあとなき山の峰のしら雲 (新古今・哀傷・八三六 寂蓮法師)

これら三首の哀傷歌は、万葉歌に見られる亡き人の火葬の煙の果ての「白雲」として捉えられる。亡き人の形見としての「白雲」である。(5)の古今歌の「白雲のたつ」に対して、窪田空穂氏は「野を形容したもので、そのさみしい感をいったもの。成句に近いものである」と言われている<sup>(18)</sup>。いるはずの人がいない空虚感がさみしさとなって一首に揺曳している歌である。「白雲」にもそうした情意性が託されているが、「白雲」の立つ野は自然な光景であるだけに、生々しい激しい悲しみは認めがたい。むしろ、その悲しみ

を浄化する存在として「白雲」は機能しているように思われる。「白」故の冷たさから悲しみを抱かせるが、「白」の純潔さ、純心さのイメージが、この悲しみを和らげていると思われる。春歌の素材として華やかさを表す「白雲」も哀傷歌の素材としても用いられる。それは、悲しみを深めるためのものではなく、その悲しみを和らげ美化するためのものとして用いられていると考えられる。

釈教歌は次の一首である。

- (8) あひ見てもみねにわかるる白雲のかかるこのよのいとほしきかな

(新古今・釈教・一九五八 源季広)  
釈教歌として、詞書にある「合会有別離」という経の文句を詠み込み、「白雲」が峰から離れるように別れのある世は厭わしいと歌っている。この世を厭わしいということ、来世に期することを余情として表現している。「白雲のかかるこのよ」とは、厭わしいのであるが、それは、会っても又、別れることがあるからで、別れることがなければ厭うべきものではないのである。そうした、この世をいとおしむ思いが、この世を「白雲」として形容したのである。嫌うべきものでありながら愛すべき思いが、この世を「白雲」として表現したと思われる。

#### 四

離別の歌は六首あるがその内、同一歌の拾遺、金葉歌は羈旅部がなく内容的に羈旅と見られるのでここでは省き四首を掲げることとする。

- (1) をしむからこひしきものを白雲のたちなむのちは  
なにし心地せむ

(古今・離別・三七一) きのつらゆき

- (2) 白雲のこなたかなたに立ちわかれ心をぬさとくだ  
くたびかな

(古今・離別・三七九) よしみねのひでをか

- (3) しらくものやへにかさなるをちにてもおもはむ人  
に心へだつな (古今・離別・三八〇) つらゆき

- (4) 思ひやる心ばかりはさはらじを何へだつらん峰の

白雲

(後撰・離別・一三〇六) 橘直幹

(1)(2)の古今歌は「立つ」にかかる枕詞として「白雲」は用いられている。(1)の例歌は、名残を惜しんでいるうちからもう既に恋しい気持ちになっているのに、別れてからはどんな気持ちがあるのかと歌っている。一層恋しい気持ちになることを余情としている。(2)の例歌は、都と東とに別れる悲しみのために、心は幣のごとくに砕けると歌ってい

る。ともに、この別れを惜しみ、旅行く人を恋しく思う一首にあって、「白雲」は別れの場面を鮮やかに色どる背景として存在している。(2)の例歌に対して、窪田空穂氏は「白雲の」という枕詞は、眼前の有心のものに取れる<sup>(13)</sup>と言われている。別れの悲しみの場の素材として用いられているが、「白雲」自体に悲しみの意味があるとは思われない。人の心の悲しみを解さないものとして存在していると思われる。

(3)の古今歌の「白雲」は遠方を暗示する意味を有している。遠く隔たることを表わしているが(1)(2)の例歌のような心砕くほどの悲しみをもって歌われているわけではない。この別れを受け止め、変わらぬ友情の誓いを歌っているためである。この「白雲」は友を遠く隔てる無情のものであるが、「白雲」の向こうに友のいることを思えば、その「白雲」は逆に希望のしるしと見られ、鮮やかなイメージをもつ素材となっていると思われる。

(4)の後撰歌は、思いを馳せることだけは支障がないのに、峰の「白雲」はどうして二人の間を隔てているのだろうか<sup>(20)</sup>と、「白雲」を否定的に歌っている。「峰の白雲」は遠く隔てられているイメージを表す<sup>(21)</sup>と言われる通りである。しかし、隔てているのは、「とほくまかりける」原因であ

るところの地方官としての赴任などのもののはずである。

そうした世俗的なことを言わないで、別れの場面の眼前に広がる遙か遠くの「白雲」に寄せている。桜に見まがう、華やかな「白雲」のせいによって、別れの悲しみを和らげ、美化するためであつたろうと思われる。

このように、別れの場面を歌う離別歌にあつては、別れの場面での眼前に現われている華やかな「白雲」を歌うことによって、その別れを美化しようとする意図があつたと思われる。悲しみの涙を美しい涙に転じることによって、旅立つ人へのはなむけとしたのだと思われる。

## 五

『新古今』以前の羈旅歌三首を取り上げる。(3)の拾遺歌は別歌であるが、内容的には羈旅歌として解せるのでここで取り上げることにする。

- (1) 草枕たびとなりなば山のべにしろくもならぬ我や  
やどらむ (後撰・羈旅・一三五八 伊勢)
- (2) しらくものうへよりみゆるあしびきの山のかかね  
やみさかなるらん

(後拾遺・羈旅・五一四 能因法師)

- (3) おくれゐてわがこひをれば白雲のたなびく山をけ

ふやこゆらん

(拾遺・別・三三五 よみ人しらず、金葉・別・三三七、万葉・一六七一「けふか越ゆらん」)

(1)の後撰歌は、野宿する旅となつたならば、この山の辺に白雲でない私が宿るのだろうかと思つて歌っている。山には「白雲」が宿るという通念を基にして詠まれている。この一首は羈旅歌にあつて、旅する苦しみがそれほど強くは歌われていない。野宿することが現実になつてしまつたこととしてあるのではなく、仮定のこととして考えられているからである。そうした余裕が「しろくもならぬ我」といった軽妙な発想が生まれたものと思われる。「白雲」は高き山を示しているが、野宿の苦しみはうかがわれず、むしろ、憧れの念さえ抱かせるものとなっている。

(2)の後拾遺歌は、白雲の上に見えている山の高い峯がみさかなのだろうかと思つて歌っている。羈旅歌の特色とも言ふべき旅の苦しみが歌われているのではない。旅中目にした雄大な自然の景を歌っている。『和歌大辞典』に記す「叙景や景観への感動を見出すことは万葉以外には稀である」<sup>(22)</sup>を思えば、万葉的な発想の歌と言うことが出来るであろう。

「白雲」には、やはり、「遙か遠く高い」というイメージがあるが、この例歌にあつてはそれが壮美となつて表われて

いる。

(3)の例歌は別歌であるが、内容的には、別れの際の惜別の情を詠むのではなく、旅の途上にある男のことを思いやっている歌であり、更に、『拾遺』『金葉』には羈旅部はなく、羈旅歌も別部に収められているので、ここでは羈旅の歌として扱う。「遙か遠く」白雲のかかっている山を眺めながら、旅行く男を思う歌である。「白雲のたなびく山」とは、「万葉の類型表現の一つ」<sup>(23)</sup>と考えられている。実景に即した表現なのであろうが、「遙か遠く」離れたイメージがもたらされている。それ故に旅行く者の苦勞を思いやり、不安にかられる思いがないわけではないが、強く訴えてくるものではない。「白雲のたなびく山」の景の美しさも印象づけられるのである。

これら『新古今』以前の三首の羈旅歌の「白雲」は、「遙か遠く高く」というイメージが中心であり、旅の苦しみよりは「白雲」の鮮やかさが極立つ用法である。それだけに、「旅中での感慨歌のほか、残留するものが旅先の身の上を思いやる（中略）旅愁・漂泊・望郷の哀感が基調」<sup>(24)</sup>である羈旅歌にあつて、「白雲」という素材は『古今』から『千載』までは定着しなかったものと思われる。次に『新古今』の前代歌人の例歌を掲げる。

(4) ここにありてつくしやいづこ白雲のたなびく山の西に有るらし（新古今・羈旅・九〇一 大納言旅人、万葉・五七四、「いづく、方にしあるらし」）

(5) 白雲のたなびきわたるあしびきの山のかけ橋けふやこえなん<sup>まし</sup>（新古今・羈旅・九〇八 貫之）

(6) 旅衣たち行く浪ぢとほければいさ白雲のほどもしられず（新古今・羈旅・九一五 法橋裔然）

(7) しら雲のかかるたびねもならはぬにふかき山ぢに日はくれにけり（新古今・羈旅・九五〇 権僧正永縁）

(4)の例歌は、「帥の任はてて、筑紫より上り侍りけるに」と詞書にあるように、旅から帰つて任地の筑紫を懐かしんで作つた歌である。それだけに、羈旅歌としては特異な作で契沖が疑義をはさみ、久保田淳氏が言われるように「雑歌に入れてもおかしくない」歌<sup>(25)</sup>と考えられている。旅の苦しみを歌うことが中心の主題である羈旅歌にあつては確かに特殊なのである。「白雲のたなびく山」は類型的表現からくる絵画的な美を形象することが専らであり、「遙か遠く高い」山というイメージで捉えられるが、この例歌では懐かしみをもつて見られているのだろう。山路を通つた旅の苦しみは思い出されていない。西方にある任地を思い出

させるものとして「白雲」は存在している。

加えて、作者旅人は筑紫で妻を亡くしている。そのことを考慮すれば、一首は任地への懐かしみだけではなく、亡き妻を偲び、その死を悼む思いが込められてもいるだろう。たなびく「白雲」は亡き妻の形見として眺められたであろう。「万葉」の「方にあるらし」が、『新古今』では「西にあるらし」となっていることより、西方浄土を示す西が直接表現されていることにより、亡き妻の往生への願いが込められていると見ることも出来る。この「白雲」は、表現上は「遥かに遠く高い」というイメージをもったものであるが、悲しみを内在させたものであったと見る事が出来る。

(5)の例歌の結句には「今日やこえなん」と「今日やこえまし」との異同がある。『貫之集』（冬・三一七）や『古今和歌六帖』（二六一五）では、下句は「山のたなはし我もわたらん」となっている。このことを久保田淳氏は前掲書において「原作はおそらく家集や『古今六帖』のような形であったであろうが、新古今のような形の方が旅の心細さ、労苦が感じられてよい。元の形ではあわれさがなく」（第四卷・四八三頁）と考察されている。確かに、「今日やこえまし」には、久保田淳氏が「今日わたしは渡るのだろ

うか」と解釈されているように、「白雲のたなびく高い山」の危うい棧を渡ることに対する強い不安感がうかがえる歌となる。

一方、「けふやこえなん」は「こえまし」のようなためらいの気持ちはうかがえないが、とうとう今日、越える日がやって来たという悲愴な覚悟がうかがえる。どちらにしても、「白雲のたなびきたるあしびきの山」に対して、高く険しく苦悩を伴う山越えが表現されていると言ってもいい。但し、上句の「白雲のたなびきたる」は、典型的表現として、「遥かに遠く高い」山にかかる「白雲」という様式美を有し、ここから直接的に旅行く者の苦しみはうかがうことは出来ない。この句に苦しみが浮かび上がってくるのは、結句の「けふやこえなん（こえまし）」という表現によってである。「白雲」に旅行く者の不安感がうかがえるのは、結句の表現と響き合うと解釈することによって可能となるのである。

(6)の例歌は、詞書にある「いつほどにかかへるべき」の答えとして、「いつ帰るか分からない」と答えた歌である。「白雲」は「いさ（白雲の）知られず」と同音の繰り返しによって「しられず」を導く働きを示す一方で、「白雲のほど」という「ほど」を形容する働きも有している。そし



て「ほど」は帰る時期と「白雲」の立つあたり、即ち、日本までの距離を意味している。こうした、巧みに構想された歌である。言わば、いつ帰るのかと尋ねられて、細かな技巧はあるが、軽妙に答えた体となっている。「いさ白雲のほどもしられず」は明快に言い切った形で、余情味は乏しいが、それだけにきつぱりとした趣のある表現となっている。この句は必ずしも実景的な表現とは言えないが、「白雲のほど」には、空に浮かぶ「白雲」までの空間的な距離が意味されている。又、青空に浮かぶ印象的な「白雲」が髣髴とされ、壮大な自然の一コマがイメージされると言つてよい。

但し、上句「旅衣たち行く浪ちとほければ」の旅立つて行く波の上の路が遠いので、「いさ白雲のほどもしられず」というのは、言わば、はぐらかせた答え方である。上句は、日本から唐までの道のりがいかに遠いものであるかを示し、その船中での不安な思いはうかがえる。しかし、下句では、その気持ちを伝えず、「いさ白雲のほどもしられず」と表すことによって、日本までの距離も分からず、帰る時期も分からないと答えている。下句は旅の不安感をうかがわせる表現なのであるが、上句の内容との響き合いを理解することによって、下句にも、船中の心細さを読むことが出

来る。

(7)の例歌は、「白雲」のかかっている山の旅寝も慣れないのに、深い山路で日も暮れたと歌っている。山路での野宿を歎く歌である。「しら雲のかかる」という類型的表現を考えると、「しら雲のかかる(峯)のたびね」と考えるべきであろう。峰は省略されてはいるが、「白雲のかかる峰」を意味し、「白雲」の「遥かに遠く高い」というイメージが生きている。又、「しら雲のかかる峰」という詞つづきからは、その白さを強調した華やかな景をイメージさせるため、それほどの悲哀感がうかがわれることはない。むしろ、下句の「ふかき山ちに日はくれにけり」という深い歎きに応じて、「白雲」にも悲しみの感情が響き合うと言える。

このように、新古今前代歌人の「白雲」詠は、「白雲」を含む句からは、旅の不安や心細さ、苦しみは直接的には伝わってくることはない。むしろ、類型的表現からくる絵画美、実景的表現からくる自然美として理解出来るが、一首の他の表現に見える旅への感慨から、「白雲」にもその感慨が響き合う構造の歌となっていると考えられる。これは、新古今歌人の詞の響きを重視した発想から理解出来る享受のあり様であって、新古今入集の前代歌人が意識した

方法であったとは言えない。羈旅歌の「白雲」に意識的に旅の感慨を読み取ったところに、新古今選者たちの「白雲」詠に対する発見があったと思われる。こうした前代歌人の「白雲」詠に対する認識に立って詠まれたのが、次の当代歌人の二首である。

(8) あけば又こゆべき山のみねなれや空行く月の末の  
しら雲 (新古今・羈旅・九三九 家隆朝臣)

(9) しら雲のいくへの嶺をこえぬらんぬ風を袖を  
まかせて (新古今・羈旅・九五五 雅経)

(8)の例歌は下句の解し方に相違がある。『新古今略注』で「月に向かひて打ちなげきたる心幽かに侍り」と評価されて以降、「さても難儀なる事よといふ感を余したり」<sup>(26)</sup>「明日もまたかと、しみじみ旅の苦しさと思はれる」<sup>(27)</sup>と解されるように、下句に旅への苦難、歎きを読み取る解釈である。それに対し、久保田淳氏は前掲書(第四卷、五五七頁)において、

この歌の世界の中で作者の立っている地点は、思うに平地ではなくて、かなりの高さを持った山頂か峠ではないだろうか。そこからほぼ同じ高さぐらいの山並がどこまでも続いているのが遠望される。その山並の尽きるあなた、すなわち夜空と接するあなた(月はやが

てそのあたりに沈むのである)に、一朵の白雲が、月明りのため夜目にもしるくかかっている。それを見ての感慨は、旅の苦しみというとらわれた現実的な感慨よりは、むしろどこまでも遠く拡がり、漂ってゆく浪漫的なものではないであろうか

と考察されている。安田章生氏の言われる「当代の芸術至上主義的傾向」<sup>(28)</sup>の歌として解されている。結句の「末の白雲」は「末の白雲は」として考えるのが、『美濃の家づと』以来の考え方のようである。<sup>(29)</sup>倒置の歌であるが、この「白雲」も伝統的な発想の「峯の白雲」である。この「白雲」も類型的表現故の「遙か遠く高く」の嶺にかかる華やかな「白雲」という様式美を有している。その「白雲」が「空行く月の末のしら雲」と表現されることによって、下句の描く景は、夜空の中に照らされ、鮮やかに浮かびあがる。「遙か遠く高く」にある「白雲」と暗喩たる月光である。この世のものならぬ幻想的な美的光景と見られる。先程引用した久保田淳氏の言われる「現実的な感慨」を超えた唯美的精神が認められ、旅の苦しさが歌われているとは思われない。但し、上句の「あけば又こゆべき山のみねなれや」という感慨には、直接的に表現されているわけではないが、山越えの困難さへのわびしさが歌われていると思わ

れる。そうした上句の歎きの情調が、「峰の白雲」にも旅の心細さとして響き合い、「遙かに遠く高い」月明かりに浮かび上がる「白雲」は、却ってその「白さ」故に不安感を誘うものになっていると思われる。この「白雲」にも旅行く者の心細さが込められていると思われる。

(9)の上句は、「白雲」のかかっている幾重の峰を越えたのだろうかという旅中での感慨である。これまでの旅路の労苦を思い、その辛い思いをしみじみと思い返し、更にまだこれからいくつの峰を越えることになるのだろうかと心細さを感じている。これらのことが余情として詠まれている。「しら雲のいくへの嶺」は、視覚的には「白雲の峰」が重層する景であり、又、観念的には時間的な広がりの中で、連続的に想起されるものである。「白雲」の美しさよりは、その陰しさと共に旅の苦しさが思い出されるものとなっている。しかし、直接的な感情表現はなく、こうした情意性も強いものではない。又、下句の「なれぬ嵐に袖をまかせて」も、慣れない嵐に袖が吹きまかれるのに任せてという余情味ある表現で、馴れない旅を続ける苦しさは気分的に解されるものとなっている。上句下句は、それぞれ具象が主になっており、旅する作者の情意性は余情として解されるのであるが、上句下句にそれぞれ表現されている

ことにより、一首全体を通して旅行く者のわびしさや苦しさは、感得される構造となっている。一首の情調は、上句と下句とで響き合いながら形成されている。この例歌の「白雲」も、「遙かに遠く高く」、華やかさのイメージはあり、加えて、苦しみの情意性も認められるが、弱く、下句との響き合いによって、旅行く苦しさの情意性が理解されるものとなっている。

石川常彦氏は「白雲」について、前掲書において「個別的现象としての『白雲』がその具体性を失って観念化し『高い山』『遠い嶺』をいうための常套的な形容語として用いられている」(一四二頁)と言われ、更に羈旅歌の「白雲」について、「旅歌類型をそのまま踏まえ、眼前矚目の景の形で——そのかぎりでは三代集と全く同じでありながら——情調象徴という全く異次元の表現たらしめる核として『白雲』が用いられたといえよう」と考察されている。羈旅歌の素材として「白雲」は必ずしも好まれていなかったが、新古今歌人たちは前代歌人のイメージした「白雲」の「遙かに遠く高く」、そして桜花にも比せられる華やかさの中に、旅の苦しさ、わびしさ、心細さと響き合うものを認め、そのことを評価した。そして、自らの歌の発想に取り入れ、余情的表現、象徴的表現の素材として活用した。

『万葉』においても、「白雲」の羈旅歌の素材としての用例を見ることは出来る。<sup>(30)</sup>そこには、実体験としての感情移入を「白雲」に見ることは出来るが、題詠化した『古今』以後は、類型化した表現として理解された。

又、(8)の家隆歌において、雲は夜明けとともに峰を離れる通念を思えば、「しら雲のこゆべき山のみね」という文脈もたどることが出来、夜が明けると旅立つのは作者だけでなく、同じく「白雲」も越えるべき峰があるとして理解出来る。同様に、(9)の雅経歌「しら雲のいくへの嶺をこえぬらん」は、「白雲」が幾重の嶺を越えたのかという読みも詞続きの上からは可能である。これら二首だけではあるが、眼前の「白雲」を旅行く自らになぞらえて詠んでいるとも考えられる。こうした詠み方は、以後受け継がれたわけではないが、良経にも次のような歌がある。

いはがうへのこけのさむしろつゆけきにあらぬころも  
をしけるしらくも  
(『秋篠月清集』・五七六)

野宿をする岩の上は、苔のさむしろのため露つぽくなつて、いつもと違う衣を敷くことになったよ、この峰の白雲は。という意味だと思われる。<sup>(31)</sup>この「白雲」も作者自身を表わしていると考えることが出来る。あてどなくさすらう「白雲」の境遇を自らの旅に重ね合わせて詠む方法が、こ

の三首の「白雲」詠に認められると思う。言わば、「浮雲遊子の意」(李白「送友人」)の如く、「白雲」に旅人の晴れやらぬ心を見るのである。この点にも、『新古今』の「白雲」詠に対する新しさがあったものと思われる。

羈旅歌の重要な素材に月がある。月は単に自然の景物としてあるのではなく、

あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいで

し月かも

(古今・羈旅・四〇六 安倍仲磨)

宮こにて山のはに見し月なれど海よりいでて海にこそ

いれ

(後撰・羈旅・一三五五 つらゆき)

あづまぢのこのしたくらくなりゆかば宮この月をこひ

ざらめやは

(拾遺・別・三四〇 右衛門督公任)

のように、月は都を思い出させるものとして詠まれている。月は郷愁と都との隔たりを感じさせる素材であるのに対し、「秋の日のうすき衣に風たちて行く人またぬをちのしら雲」(拾遺愚草・二六八四、玉葉・一一六二 前中納言定家)に見るように、「白雲」は旅人の行く手にあるものとしての素材でもあったと言える。

む す び

部立別に見た「白雲」と「雲」との顕著な違いは「白

「雲」が春歌の素材として定着していたと見られるのに対し、

『古今』から『千載』にかけて、「雲」にはそういう特徴は認められないことである。「白雲」は「雲」と違い、桜にも擬せられる華麗さのイメージを強くもった素材であったと言える。対して、『新古今』においては、春の「雲」の用例は五首あり、桜の見立てとして、「白雲」と「雲」とに本質的な違いは認められない。五首の歌人は、顕輔、雅経、公経、良経、宮内卿である。新古今歌人にとって、春歌の「白雲」と「雲」とは同じものとして理解され、「白雲」は「雲」を視覚的に印象づけるための素材であって、用法上の違いはなかったと思われる。とは言え、『新古今』においては、「白雲」は季歌にあつては、春の素材と言えたのに対し、「雲」は各季節に恒つて詠まれており、「白雲」と大きな違いを見せている。「雲」は季節を問わない素材であるのに対し、「白雲」は、桜と見立てるという伝統的発想を色濃く反映し、春の素材として定位づけられていたと思われる。「雲」は羈旅において、『千載』に二首、『新古今』に一首詠まれているが、素材として定着していたとは思われない。むしろ、『新古今』においては、「白雲」は羈旅歌には六首詠まれており、「雲」より「白雲」の方が羈旅歌の素材として相応しいと認識されていたと思

われる。

新古今前代歌人の羈旅歌の「白雲」詠は、「白雲」を含む句からは、旅の不安や心細さ、苦しみは直接的には伝わってこない。むしろ、類型的表現や実景的表現からくる自然美として理解出来る。しかし、新古今歌人は、この「白雲」に旅の感慨を読み取り、それを評価した。それは、詞の響き合いを重んじる新古今的表現法により発見されたものである。ただ眼前の景としての「白雲」だけでなく、「白雲」に詠作者の心情に通じるものがあると見たのである。新古今歌人は、「白雲」という長高き美を有す伝統的な歌語を、旅人の心情を言い表す、羈旅歌に相応しい素材として認識した。そして、「白雲」に自らの姿を重ね合わせて詠むことも試みた。

#### 註

- (1) 石川常彦氏著『新古今的世界』（和泉書院 昭和六一年刊）一三八頁。
- (2) 窪田空穂氏著『古今和歌集評釈』上巻（東京堂出版 昭和三五年刊）一四六頁。
- (3) 渡辺秀夫氏著『詩歌の森』（大修館書店 一九九五年刊）一七五頁。
- (4) 詞書は「かりのこゑをききてこしへまかりにける人」を思

ひてよめる」となっている。

- (5) 石川常彦氏は前掲書(一四二頁)において、「遙かに遠く高く隔てるものとしての『白雲の山』という類想」と説かれてゐる。

- (6) 久保田淳氏著『新古今和歌集全評釈』第一卷(講談社昭和十一年)二六五頁。

- (7) 窪田空穂氏は、『完本新古今和歌集』上巻(一〇三頁)において、「形は客観描写に似ているが、表現しようとしているものは気分である」と考察されている。

- (8) 「みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける」(古今・春・五六 そせい法し)

- (9) 註(2)に同じ。三五七頁。

- (10) 片野達郎・松野陽一氏校注『新日本古典文学大系 千載和歌集』(岩波書店 一九九三年刊) 一二六頁。

- (11) 註(10)に同じ。一三六頁。

- (12) 竹岡正夫氏著『古今和歌集全評釈』下巻(右文書院 昭和五十六年刊)二〇〇頁において、「序詞の『景』が比喩というよりは『君の心』の象徴ともなる」と考察されている。

- (13) 風巻景次郎氏『峯の山雲』(日本古典全書 新古今和歌集 月報 昭和三四年、風巻景次郎全集7 中世和歌の世界)所収 桜楓社 昭和四五年刊、二二三頁)

- (14) 註(6)に同じ。第五卷・一三頁。

- (15) 上條彰次・片山享・佐藤恒雄氏著『新古今和歌集入門』(有斐閣・一九七八年刊) 一六四頁。

- (16) 窪田空穂氏は前掲書(註(7)・一九四頁)において、「表現がおおらかで、直線的なところは、古い歌の姿であるが、詞の美しいところは新しい歌に似ている。あるいは謡物として謡われつつ洗練された結果かと思われる」と考察されている。

- (17) 『万葉』に「あしひきの山の木末に白雲に立ちたなびくと」(三九五七)、「ま幸くと云ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも」(三九五八)が見られる。

- (18) 註(2)に同じ。下巻、三二頁。

- (19) 註(2)に同じ。中巻、五七頁。

- (20) 片桐洋一氏校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』(岩波書店 一九九〇年刊) 三九六頁。

- (21) 詞書は「とほくまかりける人に餞し侍りける所にて」である。

- (22) 『和歌大辞典』(明治書院 昭和六一年刊) 二四〇頁。

- (23) 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩氏校注『新日本古典文学大系 金葉集 詞花集』(岩波書店 一九八九年刊) 九五頁。

- (24) 註(22)に同じ。『新古今』については、その特徴を有吉保氏は「千載集でひらかれた旅の心を詠む傾向を継承し、或は旅の寂しさ、苦しさを生活や人生のそれに置き換えたりにしている」(『新古今和歌集の研究 基盤と構成』三省堂、昭和四三年刊、四三二頁)と考察されている。

- (25) 註(6)に同じ。第四卷・四六九頁。

(26) 塩井正男氏著『新古今和歌集詳解』（明治書院 大正一四年刊）七二八頁。

(27) 尾上八郎氏著『評釈新古今和歌集』上巻（明治書院 昭和二七年刊）四五五頁。

(28) 安田章生氏著『新古今秀歌』（創元社 昭和二八年刊）

(29) 「白雲の下に、はもじをそへて、其下へ上の句をつづけて心得べし」と記されている。

(30) 二例を掲げると、「ここにして家やも何處白雲のたなびく山を越えて来にけり」（二八七）「家のあたり吾が立ち見れば青旗の葛城山にたなびける白雲隠る天離る夷の国辺に直向ふ淡路を過ぎ……」（五〇九）

(31) 片山享氏は、「岩の上に敷きつめた苔のさむしろが、しつとりと露に濡れている上に白雲が下りてきて、雲の衣を敷いて旅寝をすることだ」と解釈され、「白雲を衣に喻えた壮大な比喩の歌」と考察されている。（『新日本古典文学大系 中世和歌集鎌倉篇』、岩波書店、一九九一年刊、一〇六頁）

〔付記〕 本稿は、第三七回広島芸術学会例会での口頭発表をまとめたものである。席上、御教示下さった、水島裕雅氏、石川一氏に感謝申し上げる。

尚、テキストとして、和歌は『新編国歌大観』、『万葉集』は澤瀉久孝氏著『萬葉集注釋』、『美濃の家づと』は『本居宣長全集』第三卷（筑摩書房・昭和四四年刊）、

「尾張廼家苞は『国文註釈全書』八（すみや書房・昭和四三年刊）を用いた。